

物を採取できるし、周囲も見られるので非常に都合がよい。深さは200m位までですが、1ノット以上の潮流では危険でしょう。

新野 最近では海底写真技術が進み、海底に到達すると同時にフラッシュがたかれシャッターが切られる式のものもあつて、アメリカでは6,000mまでの海中で盛んに利用されています。視野は25フィート位で岩石の種類はわかりませんが、地形や生物の状態などは非常に良くわかります。

日本では佐々木忠義氏が40~50m位の所で沢山撮影していますが、朝日新聞では120mまで成功した実例があります。

むずかしい津軽海峡の自然条件

須田 外国でも最近では弾性波式を盛んに使っていますが、この場合も位置の決定ということは大きな問題で

例えばピックアップ(受震計)を水面に浮べるようなやり方も考えられますが、こうするとどうしても間接的になりますね。

佐藤 津軽海峡の場合は、水深が深く潮流が速いという点を克服するのが先決だと思います。それは精密に海底地形を調査するとか、ピックアップの問題を解決するとか、相当の準備が必要でしょう。

新野 ドレッジはその点直下の資料は採りにくいので、これと一緒に打込式コーン採取器を併用したらどうでしょう。径2吋、高さ10cm位しか取れませんが、それでも地質の鑑定には充分で、三浦半島の第三紀層では20cm位採れたことがあります。

大石 皆様からたいへん有益なお話を伺いましたので、早速これを今年の調査にとり入れ、十分な効果をあげたいと思います。いろいろ有難うございました。

(去る6月国鉄主催座談会から、国鉄の厚意により提供を受けた記事の要約)

23ヵ国を集めた エカッフエ 水利開発地域会議

国連アジア極東経済委員会(Economic Commission for Asia and the Far East)の主催する水利開発地域会議(Regional Technical Conference on Water Resources Development)が風かおる5月17日から22日までの1週間、東京神田の如水会館で開催され、正・準加盟国合計23カ国と国際機構代表ら100余名が参加し、終始熱心に水資源開発のための技術的問題が討議された。



会場 如水会館



開会を宣するロカナサン事務局長



エカツフェ水利会議会場



イヤホーンの声に耳を傾ける日本代表团
○印は兼子地質調査所長

4. 侵蝕防止・濁流の排除あるいは排砂などのいわゆる砂防工事の計画をたてるにはどうするか
5. 多目的構造物の現状について
6. 水利開発・水資源

この会議は 昨年4月開かれた鉱物資源開発地域会議（地質＝ニュース特集第1号参照）に次いで、資源関係でエカツフェがとりもつた2番目の国際会議であった。

会議には主として河川の治水・利水関係、特に洪水調節・電源開発を中心とした8つの議題が提出された。

各々の議題についてはあらかじめ用意された論文があつて、これを骨子として各国代表はそれぞれ自国の開発の現状、施設構築の計画などを紹介し、行政機構上あるいは技術上、また経済上種々の観点から具体的な問題を提唱され、これらの問題に関して関係国代表が随意に発言して、質議討論が行われた。

提出された8つの議題

1. 多目的水利開発（註：いわゆる日本の総合開発に当る）が経済的および社会的条件にどのようにマッチして行われているか
2. 流出率など河川利用の基礎となる水理調査の基準を決めるにはどうすべきか
3. 労働力・構築材料・地方事情などに最も適した水利構造物の型式はいかにして選ばばよいか

開発のための行政機構上の問題について

7. 多目的開発事業をもちあげる各種の因子について
 8. 水利調査に必要な各種の測定基準・用語の統一
- などであつて、資源調査会の安芸博士を議長に選出し終始熱心な説明・討論がくり返された。

日本側代表団の構成は外務・通産・建設・農林の各省・大学・民間からの代表及び随員合計22名であつた。

日本側の提出した主題は電源開発事業、石淵ダムなどいわゆる多目的ダム、流出の実測例、愛知用水、貯水池堆砂などで、特に地質関係では貯水池堆砂の問題が注目された。なお地質調査所からは兼子所長が議題4の担当随員として連日出席した。

また、この会議と平行して、日比谷公園においては開発・建設機械の展示会が、三越本店では河川協会の展覧会が公開され、更に会議終了後は日光～新潟班・北上班・箱根～関西班の3班に分かれて巡検旅行が行われ、これらを通じて招致各国の代表に、再建途上にある日本の国土開発・建設技術の現況をつぶさに紹介された。

（地質部）



エカツフェ協賛



“川の文化展”